

## 忘却の彼方

昭和30年代、私の青春真っ盛りの時代の娯楽は第一に映画であった。戦後の混乱は一段落し、世の中は高度成長に向かっていく未来志向の世の中であった。

だれもが楽しめ、退屈な日常を彩ってくれる映画、文芸路線では黒沢明や溝口健二、小津安二郎など一流の賞を受賞した監督が日本映画を世界的な水準に押し上げた。また娯楽路線では石原裕次郎や小林旭などビックスターが出現し、中村錦之助が時代劇ブームを起こした。日活や、東宝、松竹、東映など、映画会社が競って次々とスターを売り出し、有楽町や日比谷には豪華な封切館もできて、私たちに夢を与えてくれた。

やがてテレビの普及とともに娯楽も多様化し、時代の変化にもなつて映画離れ現象が起きて次第に映画館に足を運ばない時代になってしまった。たまにはヒット作品もでて話題になったりするが、往年の栄光はもはやない。私も子育てにおわれり、興味がほかのところに向いていたりで映画に対する関心が薄れていった期間あったが、高齢になった今、海外旅行はおろか、温泉巡りを除いては国内旅行もあ

入っている

まりしなくなつた現在、映画鑑賞を再認識して最近はしばしば足をはこんでいる。紆余曲折をへて、映画という若いころに熱中した娯楽に戻つたということだ。テレビとは違い臨場感がたつぷりだ。幸いなことに、一時閉館していたもよりの厚木の映画館が再開し、上映の予告編やスケジュールを調べては出かけることが多くなつている。最近見た次の映画について考えさせられることがあつた。

2013年に制作され、ドイツ映画としては異例のヒットを記録した「わすれな草」(原題 *VergissMein nicht*) という題名の映画である。ロマンチックな題名とはうらはらに、とてもシリアスな内容であつた。人生の晩年に時として訪れる、何もかも忘れていく認知症患者。副題として「今日は他人、時々知人、でも愛があれば大丈夫」とある。監督と脚本を手掛けたのは作家でもあるダーヴィットで、認知症を発症した母グレーテルを介護する日々を描いているドキュメンタリー映画だ。

グレーテルは1960年代、ヴェトナム反戦デモをきっかけに 政治に目覚め、大学を卒業後はテレビで活躍し、女性の社会的進出の先鋭的な存在であつた。大学教授の夫、マルティと結婚をし、お互いに自由恋愛を認め合い、社会主義ドイツ学

入っている

生連盟の活動に参加して「革命の母」と呼ばれる闘士であった。高齢になるまで政治活動を続け、多様な党に所属して女性運動に参加してきたのだが、そのグレーテルが、70歳代になったころから記憶があいまいになって、行動がぎこちないものになり、2008年「アルツハイマー型認知症」と診断される。夫マルティは大学教授の職を辞し、グレーテルの看護に没頭せざるを得なくなる。

映画監督であり、作家でもある息子のダーヴィットは父の介護を手伝うために帰郷し、父に日々の疲れを癒すための旅行を勧めて、その間、友人のカメラマンとともに、母の介護をしがてら、その様子を記録に取っていく。雑多な仕事から解放されて、自由な精神の持ち主になってしまったグレーテル。しだいに病状は進み、終わりの見えない先にある「死」という問題を、それでも深刻になることなく、むしろすべてを忘れ去ってしまった母の明るい面を描き出し、アルツハイマー病の姿をあからさまに映し出してはいるが、撮影する息子の目に残酷さはなく、全体にユーモアさえあるのは不思議である。「さあ、家に帰らなくちゃ」という母に「ここが家だよ」と息子。「薬を飲もう」といえば「あなたが飲めば」と返す。微笑ましい情景でさえある。

入っている

これは病人の観察記録という冷たい視線ではなく、母と息子の強い絆があるからだと思う。発症から5年近く経った2012年、静かに最期を迎える。若いころ、第一線で活躍していた美貌のグレーテルの映像と、認知症になってからの晩年の姿との対比は無残である。

ダーヴィットが、母の認知症患者としてありのままの姿を描いたこの映画を撮影したことについて、当人のグレーテルが理解していたのかというインタビューの疑問にたいして、彼は次のように答えている。「撮影を始めたのは母が具体性のない事柄をもはや理解できなくなった時期でした。母はカメラを持った男性が家の中で自分にカメラを向けてくるのをいつも不思議がりました。そのたびに僕は母さんの映画を撮っているんだよ、と説明しました。母はそれをおもしろがりました。完成した映画を観たらきつと気に入ってくれたはずですよ」。

また父のマルティは妻の介護をしながらも、誰かに必要とされていることや、誰かのために存在することがすばらしいことだと気づくのだ。それが愛する妻であればなおのことである。

この映画に描かれていない時期、すなわち母が発病する以前の活気に満ちた生活

と、終末期のラストシーンにいたる六か月間に起こった出来事は、ダーヴィット本人のエッセイ書、『わすれな草』に描かれていて、出版されると反響が大きかった。エッセイでも記憶障害が危険な状態になって、健康が深刻なダメージを受けていく様子が克明に描かれているとのこと。私は残念なことに読んでいない。グレーテル亡きあと、夫のマルティは完成した映画をみて、「人生はすばらしいと思ったよ」といったという。映画のキャッチコピーには「ドイツ式最後の時間の寄り添い方」とうたっているが、「認知症」の実態を扱った映画は、日本を含め世界でも数多く制作されているようだ。他に強く印象に残ったものとして次の作品がある。

入っている

2015年に日本でも上映されたアメリカ映画「アリスのまま」(原題 Still Alice)は、若年性アルツハイマー型認知症を患った言語学者アリスが、病名を宣告されたときの衝撃、懊悩、(彼女は大学教授であった)、そして次第に人間性がこわれていく過程を描いたものである。神経科学者であり、アメリカアルツハイマー協会のコラムニストであるリサ・ジェノヴァのベストセラーになった小説『静かなアリス』を映画化したものだ。

アリスは医師である夫と、3人の子供たちと充実した生活を送っていた。しかし、50歳の時、大学での講義中に突然言葉が出なくなったり、ジョギングしていたときに自宅に帰る道がわからなくなったたりする。病院で受けた診断は「アルツハイマー」だった。大体あと2年ぐらいでほとんど自分が誰だかわからなくなると宣告される。それまで人生にささげてきたものが何もかも消えてしまうという恐怖。夏、休暇を過ごすために海辺の避暑地にやってきたアリスは夫に「これがアリスでいられる最後の夏よ」と告げる。

アリスは刻一刻と記憶を失っていく。ある日、何気なく操作したパソコンに、まだ健康だったときに、未来の自分にあてたビデオメッセージを見出す。「アリス、私はあなたよ、大事な話があるの。あなたが自分を失ったときに偶然、このビデオを観たら、そうしたら、引出しの奥に入っている薬を飲みなさい」その薬が何であったかは明かされていない。

好きな食べ物を忘れ、周りに迷惑をかけることがあつたら死にたいと思ったことも忘れ、「昨日のことは忘れ、明日のことはわからない、私はいまこの瞬間を生きるしかない。それさえも忘れてしまうのよ」。というつぶやき。彼女のアイデン

テイテイはようになるのか。若天性であるだけに余計深刻で悲しい。

この映画のアリス役で、迫真の演技をみせた女優ジュリアン・ムーアは87回アカデミー主演女優賞を受賞した。

「認知症」は今や世界的な問題なのだ。世界保健機構（WHO）が発表した報告によると、世界の認知症患者は現在およそ3560万人、2030年には2倍になると予測しているという。昨年、G8認知症サミットがイギリスで開催され、日本からは厚労省副大臣が出席した。日本の現在の認知症患者は462万人、軽度認知症はさらに400万人加わり、高齢者の4人に一人が発症しているのではという。また、2025年には700万前後に達するのではという試算もあるという。超高齢者社会をむかえる日本にとっても大きな社会問題で、政府は対策が急務となり、厚労省は認知症施策「新オレンジプラン」を発表した。プランには7の柱があり、「認知症への理解を深め、適切な医療、介護、高齢者に優しい地域作りなどを重視する」というものである。

この現実には80歳を過ぎた私にとっても深刻な事態である。「明日は我が身」とい

入っている

うが、我々同年配のものは、いつか自分も——という不安を持ち続けている。まさに身に染みる問題だ。私は人一倍落とし物、忘れ物が多い。外出して傘や帽子を無くすることはやはり日常茶飯事である。9月5日、高校時代のクラス会で岩手に2泊の旅をしたのだが、大切にしていたお出かけ用のフェーラーのハンカチ、とっておきの赤い絹のスカーフ、ゴブラン織りの化粧品ポーチを紛失した。当日は小田急線で事故があつて電車が遅れ、新宿に着いたらJRの停電でダイヤは乱れ、ぎりの時間でやっと指定の新幹線に飛び乗ったというハプニング続きだったことにも原因がある。それにしても、買ったばかりの品物を電車で置き忘れるという現象は注意力散漫のなせることだろうか。度重なる紛失は毎度のこと、またかと、深い自己反省に陥っている。もしかして——と不安は増幅する。

色々と聞きかじったところによると、認知症を患う人は几帳面で真面目なタイプが多いとのこと。それならママは絶対大丈夫よと娘たちは安心している。何事にもいい加減に対応する思慮のたりない性格は、なりにくいということのようだが、決めつけるわけにもいかないだろう。私の周りでも介護施設に入居した友人が2人いる。一人は同じ話を何度も繰り返した。話していることを片っ端から忘れていくと

入っている

いう物忘れの典型的な症状があった。明らかにおかしいと私でさえ気づいたとき、ご主人から電話をもらった。もはや同居には限界があるということだった。彼女も異変を自覚していて、「どうしてこんなことになったのか」と涙ぐんだ。返す言葉がなかった。もう一人の友人は妄想の世界にどっぷりと浸かってしまった。自分は何者かに狙われているとか、身の周りのもの、財布とか家の鍵を盗まれたといつて周りの人に疑いの目をむけた。動作は攻撃的になり、もう4、5年になるが一度もあつていない。

岩手への旅行の途中、盛岡郊外の田舎町で内科を開業している同年配の従弟に会ってお喋りをした。跡を継ぐべく医者となった息子は、開業医になることを嫌い、大学の研究室にのこるといふ。彼はそれを快諾した。心身の健康が保たれている限り、現在の状態を維持し、地域医療のために尽くしたい、しかし、肉体の健康には注意しても「認知症」という予防のしようがない病気にたいしては不安があると言ふことだった。医者にとつても予防の難しい領域なのだ。

時として思う。すべてを忘却の彼方に押しやって無我の境地にたち、本能の赴く

入っている

ままだに彷徨い、人生の最期を迎えることは本人にとっては幸せなことでは無いだろうか。瀬戸内寂聴は以前、なにかのインタビューで理想的な死に方は「行方不明」といつていた。昼の静寂を破って、市役所から拡声器の放送が響くことがある。

「市役所からお知らせします。本日〇時〇分ごろ、白いブラウスに紺色のズボンをはいた、〇〇さんが行方不明になりました。お心当たりの方は最寄りの警察にご連絡ください」。

「恍惚の人」になった〇〇さんの脳裏には、きっと幼いころに駆け回った大自然の原野がいつぱいに広がって魂は高揚しているに違いない。

(二〇一七年九月)